

## 第1章 調査の経過

昭和58年度の発掘調査は、史跡整備計画に基づき三堂推定地に主調査区を設定した。位置は遺跡全体にかぶせた20m方眼のE・F-3・4区にまたがる。ここは昭和56年度第5、6トレンチの間で事前のボーリング探査で礎石の遺存が想定され、三堂の内の何らかの建築遺構に当たることが予想された。主調査区は当初東西14m、南北27mの長方形として83A区と呼んだが、後に東南部と西南部を拡張した。また三堂推定地の平坦地形北部での遺構埋没深度確認のため、C-3方眼南端、D-3杭北東側に2×3.5mの試掘トレンチ83B区を設定した。現地における調査は、昭和58年7月18日から同年10月31日までで、約450m<sup>2</sup>を発掘した。その経過については日誌の抜粋を以下に記す。

- 7月18日 調査器材の搬入、発掘区域に地縄を張る。
- 7月19日 調査区への仮設道路を設置。
- 7月20日 重機による表土及び旧水田耕土の掘削。礎石の頂部を認める。発掘区周囲に排水溝をめぐるせる。
- 7月22日 旧水田床土以下の削掘を人力で進める。瓦礫を積んだ面を検出(上層積み増し面)。礎石もかなり遺存。
- 8月3日 旧水田床土の排土を概ね終了。残存礎石から5×4間以上の堂址を確認。礎石の入る掘り方の確認必要。
- 8月6日 堂址の西方限界を知るため南西部を幅5m、長さ10m程西へ拡張。
- 8月8日 堂址前面と池汀線確認のため南東部を幅5m、長さ6m程東へ拡張。
- 9月2日 西側拡張部の玉砂利集積の記録とりを終了。
- 9月7日 上層積み増し面の記録とりを終了。
- 10月8日 各礎石掘り方のセクション図、写真撮影などを終了。
- 10月15日 83A区の全景写真を撮影。
- 10月19日 83B区の掘り上げ、記録終了。

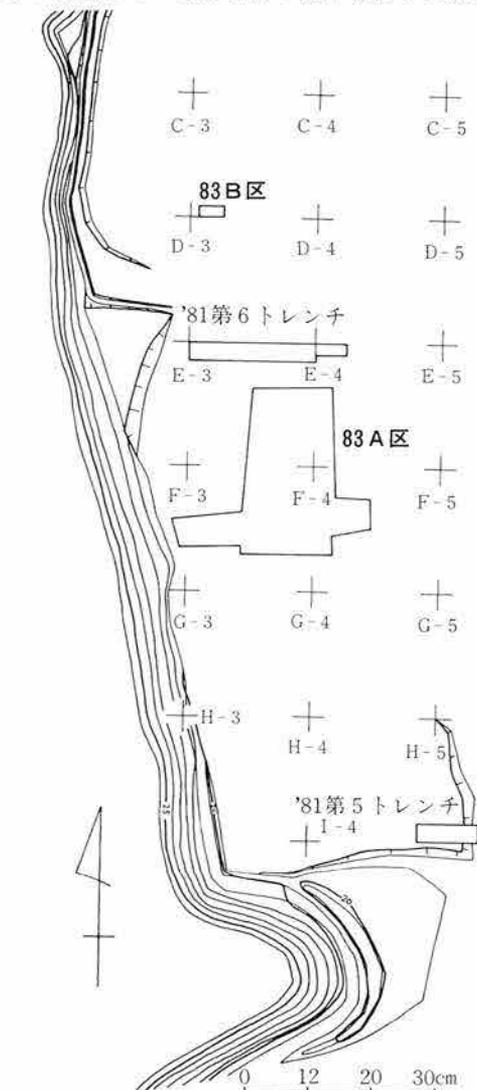


Fig.1 調査区位置図

10月24日 83A区の平面図、柱通りのエレベーション図などの作成を終了。

10月26日 山砂による遺構面の埋め戻し。

10月31日 排土による埋め戻し完了。器材を撤収して現地調査を終了。

## 第2章 検出された遺構

### 〔1〕 83A区（主調査区）

83A区は重機による掘削開始直後から、大きな礎石の埋没遺存が確認されたので、かなりの土量を手力で掘り上げることとなった。南部では現地地表下45cm、北部では85cmのあたりで、瓦片、円礫、伊豆石片などが散乱する層に当たったが、これが堂址の火災後整理の結果形成されたと思われる上層積み増し遺構であった。それを排除すると礎石を据えるための掘り方プランが検出でき、堂址の規模確認ができた。さらに縁束、雨落ちなども礎石掘り方確認面（地山上面）と同一面で検出できた。また発掘作業のための排水溝断面で、堂址ののる面の造形成法についても知ることができた。堂址前面（東方）の池汀線は予想よりも東側にあるらしく、今回の調査範囲では確認できなかった。以下、遺構の各部について概要を記することとする。

#### （1） 上層積み増し遺構（PL. 2-1~3）

堂址の礎石掘り方No.1と7の間からNo.29上にかけて、地上山に10~25cmの厚さで幅1~1.5mほどの瓦礫堆積が見られた。また礎石掘り方No.11~南西拡張区北西端には、瓦片を含む玉砂利堆積が幅0.5m、厚さ10~20cmで認められた。上記の二列の堆積をつなぐようにNo.1掘り方北側からNo.10掘り方西側にかけても、瓦片や石片がやや集中して認められた。これらのことから、調査区北西部を囲むようなL字状の土堤部が想定できたので、これを上層積み増し遺構とした。その東側では玉砂利混りの砂層が不安定ながら認められるので、かつての苑池が埋没する過程で水位が上昇したのに伴ない、ここに積み増しがなされたものと考えられる。L字状の内側（西および北側）では、注意して掘り進んだにもかかわらず、いくつかの浅い凹みや不整形で規則性のないピット以外に、顕著な遺構は認められなかった。堂址廃絶後、規模を縮小して再建しようとする試みのような、何らかの作事のあったことは考えられるものの、ついに堂宇の再建は成らなかったのではないかとと思われる。この積み増し面の西端ではFig. 9-21、22のかわらけが出土しており、その時代は15世紀以降で、堂の廃絶からそう遠くない時期と考えられる。

#### （2） 堂址（附図およびFig. 2）

##### ① 造成面

堂址を構成する礎石掘り方の確認面は、主として谷あいの堆積層である黒色粘土層上面であったが、一部では土丹（泥岩）による地業面となっていた。これを南西拡張区から南東拡張区にかけての東西ラインで見えてみると、西端の山裾近くでは岩盤削平面があり、そこには土丹で埋められた角

形柱穴が1口検出されている。岩盤削平面はすぐに地山層（黒色粘土）下の自然傾斜となって消えてゆき、礎石掘り方No.2～No.30にかけてのラインまでの間は、地山を削平した面となっている。その間でも部分的には土丹塊が地山にめり込むように埋没している。調査区東側に行くに従い、土丹塊は量を増し、南東拡張区では厚さ50cm以上の土丹地業層を形成している。

以上のことから、この地に堂宇を建立するために、西側にあった山裾を切り落とし、その土砂岩石をもって東側の谷を埋めて平坦地を造成したことがわかる。その築造時期については決定的な証拠を把握できなかったものの、古代の遺物が僅かに出土することから、古代の生活址を破壊しうるような中世初頭以降とすることができる。

なお、山裾を切り谷を埋めるという造成法は鎌倉では一般的なことであるが、堂宇を建立するための基壇についてはついに確認できなかったし、掘り込み版築のような地固めも、礎石掘り方の壁で見る範囲では存在していない。ここに建てられた堂は、基壇をもたない形式のものであったと考えざるを得ない。

## ② 礎石掘り方および礎石

礎石掘り方は、今回の調査範囲内では計26口検出された。その構成から考えられる堂の規模については後述するとして、掘り方の状況について先に触れておく。

礎石掘り方はすべて径2～2.5m程度の円形で、深さは0.6～1mほどであった。断面形は鍋底状と形容しうる。掘り方の覆土は2層に大別でき、上部はきわめて軟弱な灰色の粘土で、これは堂址全面を覆う粘土層と共通のものであった。下部は地山の黒色粘土の再堆積土で、土丹粒や礫を混入するがかなり固くしまっている。後述するように覆土下部にある伊豆石（玉石）は根石としての原位置を保っているのに対し、上部は瓦片や割れた石片などを含み、しかも礎石自体も原位置にはないことからして、火災後に再建に利用するため礎石を掘り起こそうとして、いくつかは抜き去ったものの、全部を掘り出さないうちに再建を断念したのではないかと思われる。このことは掘り方No.26やNo.23、No.5などが、ほとんど根石を残さず、底近くまで軟質粘土であったことから首肯しうるであろう。

礎石は、堂の身舎部分を支持していたと思われる大型のものが26個（割れたもので可能性あるものを含めると28個）が調査範囲から検出されているが、柱ののっていた当時の原位置にあるものはひとつもない。もっとも原位置に近いと思われるNo.1掘り方中の礎石でさえ水平位置が動かされている。No.2・3間にあるものは調査前より現地表面に露出していたし、No.18には他の場所の礎石が移動転覆させられ、No.10、11、12、30掘り方のように複数の礎石やその破片が転落しているものもある。

礎石はすべて伊豆石と通称されている安山岩の河原石である。大きさは最大のNo.29掘り方中のものが長径2m弱を測る。形は様々であり、概して河原にあったときの水磨面を多く残している。柱を立てるための柱座が、残存する礎石すべてに認められた。これは礎石の上に当る面をノミで円形水平にはつただけのものであるが、径70cmに達するものもあり、柱の太さ約2尺程を想定できる。柱座の周辺は石の表面が大きく剥離しており、火を受けるとはせる安山岩の特質からして、火災に

遭って柱の根元まで火熱を受けたことが推察される。このため柱座の切り出しの全形をとどめる礎石は残存していない。

礎石は原位置を動されているものの、掘り方中に残存する玉石はかつて礎石を支えていた根石であることは容易に想像できる。その状況はNo.1～3掘り方に良く残されており、掘り方を掘った後に数十個の径20～30cmのやや平たい伊豆石の円形河原石を、地山の粘土で間をつめながら積み重ねて礎石を受け支えるようにしたものと考えられる。礎石自体が河原石で形がまちまちな上に、必ずしも平たく置くとはいえなかったようで、長手方向の先に柱座を切り出したものもあるので、このような根石の積み方は複雑ではあるが一面便宜的ともいえる。根石は前述のような大きさであり、鎌倉の各所の遺跡で見ると、屋敷や小堂宇の礎石として転用するのに手頃なものであるから、この大型礎石が動かされている原因のひとつに、根石の抜き取りということもあるのではなかろうか。とくに根石の残存は南東部のNo.1～3およびNo.7掘り方に顕著で、他の部分では殆ど残っていないことは示唆的である。

### ③ 椽 束

#### a：礎石椽束

掘り方No.12の西方、No.5の南方では、地山の黒粘土に下部をめり込ませるような形で、中型の礎石が据えられていた。さらにNo.6掘り方の西方、No.4の南方には、同程度の石の抜き去られたような凹みが認められた。またNo.6掘り方とNo.1の中には中型の礎石が転落していた。これらのことから、掘り方をもつ礎石建物の周囲に、一間通りに中型の礎石が配されていた可能性が強い。この礎石は、濡椽もしくは裳階の柱を支えていたものではないかと思われるが、堂の東側や北側では中型礎石を据えたような凹みは検出できなかった。この中型の礎石の性格については、今後さらに検討を要する。

#### b：角柱椽束

礎石掘り方より少し外方の四周に、半間ごとに角形の柱穴が検出された。その規格については表1に示したように、7×9寸の角柱と考えられる。掘立柱式に下部は地中に埋め込まれ、部分的に柱根を残しているものもあり、立ち腐れの状態で廃絶したものと思われる。柱の下を支えるために礎板や礎石を埋め込んでいるが、東西の面では礎石を、南北面では礎板をと、使い分けているようである。角柱や礎板を埋め込むための掘り方については、遺構保存のためあえて掘り上げなかったが、概ね椽束「コ」あるいは「ノ」の抜き跡程度の大きさと考えてよかろう。この角柱椽束は「ア」、「イ」のように石でふさがれたものや、「オ」、「カ」のように土丹まじりの地山土で、地業面補修の際に埋められてしまったものもあり、堂の最終段階まで残っていたとは考えにくい。しかし角柱部覆土は礎石椽束下の土より新しい感じなので、ある時期の椽側修理によって、この大きな礎石をもつ堂にはそぐわない掘立式が採用されたと理解したい。その時点においては各掘り方中の礎石はきちんと据えられていたはずなので、この角柱椽束によって示される寸法が、かつての堂の間尺を示してくれるものとして建物規模を後述のように計算したものである。

表1 角柱椽束観察表

番号	東西長	南北長	深さ	柱根	礎板	礎石	木皮	番号	東西長	南北長	深さ	柱根	礎板	礎石	木皮
ア	21 <sup>cm</sup>	27 <sup>cm</sup>	62 <sup>cm</sup>	○	—	○	○	ソ	26 <sup>cm</sup>	26 <sup>cm</sup>	45 <sup>cm</sup>	○	—	○	—
イ	21	28	50	—	—	—	—	タ	21	26	45	○	—	○	—
ウ	20	26	55	○	—	—	○	チ	27	27	43	—	—	○	—
エ	25	27	50	—	○	—	○	ツ	24	27	43	○	—	○	○
オ	27	21	50	○	○	—	—	テ	22	27	35	○	—	○	—
カ	26	20	57~62 <sup>*</sup>	○	○ <sup>*</sup>	—	不明	ト	20	26	45	○	—	○	—
キ	26	21	50~58 <sup>*</sup>	○	○ <sup>*</sup>	—	不明	ナ	24	24	43	—	—	○	○
ク	26	22	53	—	—	—	○	ニ	22	27	34	—	—	○	—
ケ	26	21	不明	○	—	—	○	ヌ	26	20	38	○	○	—	○
コ	25	20	65	○	—	—	○	ネ	28	20	45	○	○	—	○
サ	27	23	60 <sup>*</sup>	—	—	—	○	ノ	—	—	—	—	—	—	—
シ	20	27	55 <sup>*</sup>	○	—	—	○	ハ	27	21	55 <sup>*</sup>	○	○	—	○
ス	21	27	56 <sup>*</sup>	○	—	—	○	ヒ	24	20	50	○	○	—	○
セ	19	26	52	○	—	—	○	フ	25	20	57 <sup>*</sup>	○	—	—	○

○印は存在を示す。 \*印はボーリング棒による確認を示す。

#### ④ 雨 落 ち

掘り方No.6、12の西方で、岩盤削平限界の少し東側に、伊豆石のやや長細い河原石が3個だけ一列に並んで検出された。このあたりの面上にはとくに溝などの遺構は検出できなかったが、堂の軒端を示す雨落ちラインとしては、この伊豆石列の他には考えられない。しかし他の南、東、北側では雨落ちに相当する遺溝は認められていない。焼け跡整理の際に削平されてしまったのかもしれないが、堂の北西部は未発掘であるので、結論は今後の調査にゆだねたい。

#### ⑤ 堂の規模 (Fig.2 参照)

83A区に検出された堂址は、身舎部分で5間四方、内陣3間四方、来迎壁を有し、四囲に裳階もしくは椽をもつ形と考えられる。堂の正面はほぼ東に面し、軸線は現代磁北より12°ほど振れている。柱配置に関しては、礎石が動かされていることもあって、角柱椽束の心心距離から割り出した数字を使わざるをえなかった。

堂の正面中央柱間は450cm (15尺)を測り、その両脇は各405cm (13.5尺)、さらに脇の外陣部分は336cm (11.2尺あるいは330cm—11尺)という間尺を示す。堂の奥行きは、外陣部分330cm (11尺)に内陣部分の2間が各382cm (12.7尺強)あり、来迎壁背後が336cm (11.2尺)、さらに奥の外陣部分が330cm (11尺)となる。都合正面1932cm (64.4尺)、奥行1760cm (58.6尺)ということになる。

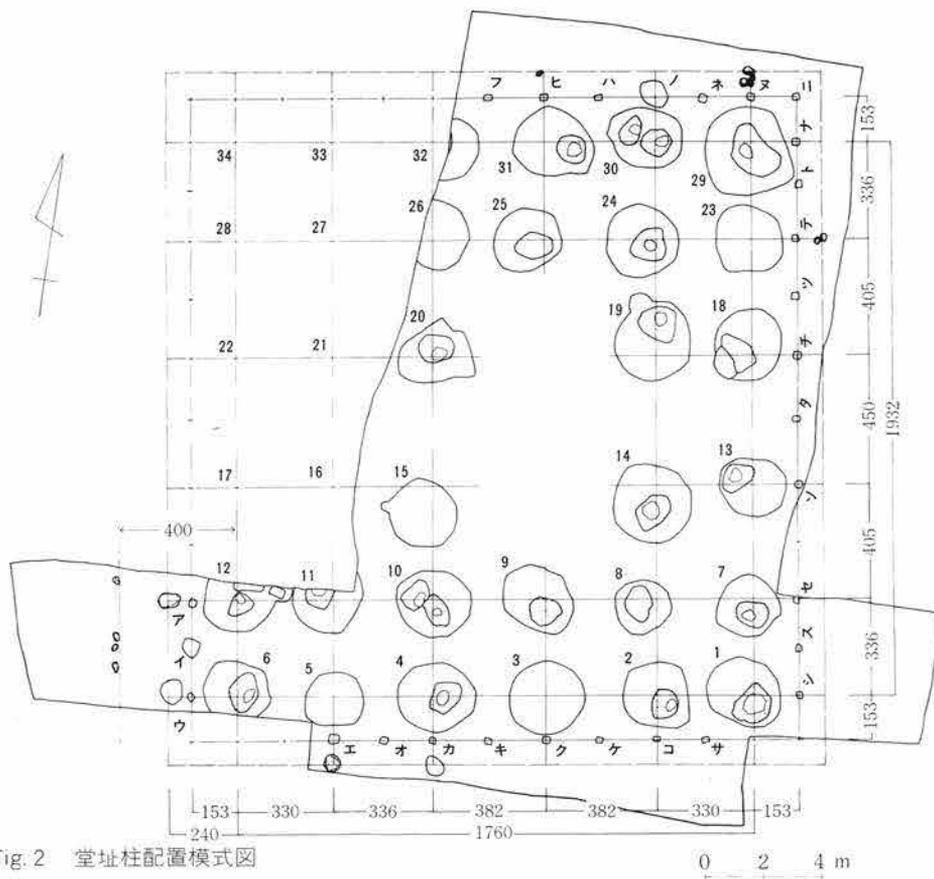


Fig. 2 堂址柱配置模式図

椽は角柱椽束までで153cm（5.1尺）、礎石椽束までで240cm（8尺）あり、雨落ちラインまでは400cm（13.3尺強）ということになる。

以上の寸法はあくまでひとつの目安にすぎないが、何となく寸寸でうまく合っているようにも思われる。しかし問題となるのは、No.13-18掘り方向に対して、No.14-19間およびNo.15-20間が変に幅広くなって、しかも少しずつ南に偏っていることである。とくにNo.13-14-15のラインは、礎石や根石の抜き取りに際して掘り方が荒されていることを考慮に入れても、著しく不揃いである。この問題を解決するためには、将来堂の後半部にあたる西側一帯をも調査する必要がある。

### (3) その他

#### ① 池汀線

上層積み増し遺構はある時期の池汀線と言えないこともないが、源頼朝以来の永福寺苑池のものとはみなし難い。今回の調査では堂前面の椽束より4.5m以内には、池汀線は確認できなかったとしか言えない。なお今回の拡張区より東方へ向けてのボーリング探査では、顕著な（石を並べたような）池汀線には当らなかった。かといって洲浜状のものを想定する根拠もないので、来年度以降もっと広い範囲が発掘されるのを待たねばならない。

② 瓦片集中廃棄地点 (Fig. 3)

礎石掘り方No.25は、掘り方確認面よりも盛り上がるように瓦片や礫が集中していた。これを四分割して掘り進めたところ、礎石は原位置を動かされてはいたが存在し、瓦片は表層に多いものの、軟弱な灰色粘土層中にも厚く包含されていた。すなわち、礎石または根石の抜き取り作業がなされた後に瓦片や礫がこの掘り方内に集中して廃棄されたものと考えられる。

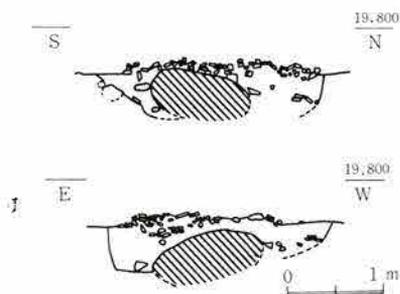


Fig. 3 No.25掘り方断面図

この穴から出土した瓦片を見ると、初期の胎土良好なもの、新しい粗胎のものや、文字スタンプのあるものなどが混在しており、特定の時期のもののみ捨てられたわけではない。陶磁器類はごく少量が含まれていたにすぎないが、焼けはせた安山岩の剥片や鎌倉石の割れたものなどがかなり多く含まれ、瓦片とて石と区別されて集められたものとは考え難い。抜き取り穴に瓦礫が集中して捨てられたものと思えない。その時期は瓦礫の混在ということで、上層積み増し面の築造とはほぼ同時期と思われる。そうすると堂の廃絶後の礎石抜き取りと瓦礫の集中廃棄、上層積み増し面の築造とは、一連の作業であったとみなせるのではなかろうか。応永12年の火災以降も、永福寺は寺としての活動はしていたようなので、これらのことは享徳3年(1454)までの約半世紀間になされたと思われ、想像をたくましくするならば永福寺の最終末の姿を示すものともいえよう。

〔2〕 83B区 (Fig. 4)

三堂推定地の北方、現地表面に弱い段差の残るD-3杭の北東側に、幅2m、長さ3.5mのトレンチを設定し、これを83B区とした。これによって昭和56年度第6トレンチ以北の遺構埋没深度を確認しようと試みたものである。

- I: 表土
- II: 暗青灰色粘土 (水田耕土)
- III: 黒色砂粒 (宝永火山灰)
- IV: 青灰色砂層 (玉砂利多し)
- V: 黒灰色粘土 (地山)

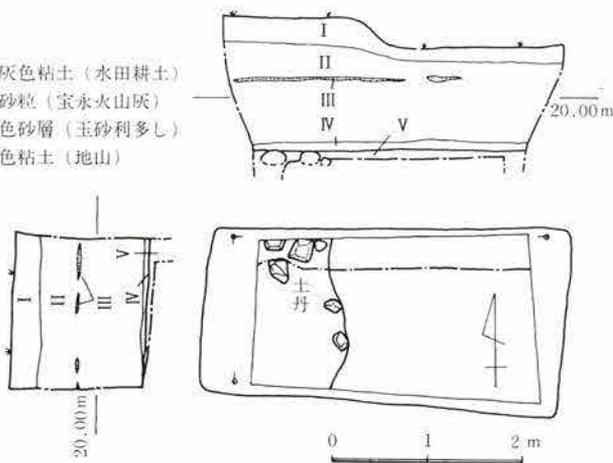


Fig. 4 83B区平面及び土層断面図

現在の表土の下は旧水田耕土と考えられる青味をおびた灰色粘土が厚く堆積している。

この粘土層の中位には、宝永年間の富士山噴火の火山灰と思われる黒色砂粒が、断続的ながら帯状に残っている。その深さは現地表下30~70cmと現地表高からの差はあるものの、標高は20m 20cm前後ではほぼ水平の堆積を示している。現地表よりトレンチ西端で1m 40cm、東端で1m 10cmの深さで、黒灰色の固く締った粘土に達する。これは83A区で検出された地山と等しい。この地山の上には厚さ10cm内外の青灰色の細砂層がのっており、その中には小さめの玉砂利が多く

含まれ、瓦片も若干出土している。トレンチ西側では、数個の大型土丹塊が地山中にめり込んだ状態で認められた。

以上の状況は83A区の北部とよく似ており、また昭和56年度第6トレンチの地山の上の状態とも似ている。さらに83B区の地山面の標高はトレンチ西端で19m40cm程を測り、83A区や以前の第6トレンチと大きな差を認め得ない。現地表は近世以降の耕作によっていくつかの段差をもつ北西-南東方向の微傾斜地となっているが、本トレンチ発掘の結果三堂推定地の平坦面はずっと北方まで広がることが明らかになった。ただし建築遺構などの有無については、トレンチがあまりに小面積であったため何とも云えない。来年度以降もこの北部について更なる調査の手を加えることが求められる。

### 第3章 出土した遺物

今年度の発掘調査で出土した遺物は、昨年度までと同様、瓦類が圧倒的に多い。その他には、舶載磁器、国産陶器、土器、金属製品、石製品が、僅かな量ではあるが出土している。遺物の出土状況としては、堂の建てられた面上に散乱した状態、あるいは上層積み増し面や礎石掘り方覆土上部などにまき込まれた状態であって、層位的な区分はなしえない。また新旧のものが混在してしまっており、上層積み増し面形成時にかなりの攪乱がなされたと考えられる。そこで以下は、遺物の種別にその概要を記すこととする。

#### (1) 瓦 類

今年度の調査で出土した瓦類は、コンテナ箱にして120箱以上にのぼる。出土地は調査区全域に及ぶが、とくに上層積み増し面や各礎石掘り方中からが多く、83B区での出土は少量であった。

瓦類には女瓦、男瓦が圧倒的に多く、鏡瓦、宇瓦、鬼瓦、文字・記号をスタンプ捺した瓦なども若干量認められた。瓦の時期としては、創建期から廃絶時使用のものまで、何時期かの多種多様の瓦が混在していた。またかなりの量の瓦が二次的な火熱を受け、焼けて膨れたものや曲りくねったもの、ガラス状に溶けて硬質になったものなどがあり、文献の火災記事を裏付けている。

今回の報告に当っては、軒先瓦の分類の基準を下記のようにまとめてみた。それは、今年度調査では、寺域内でこれまでに知られている様々な鏡・宇瓦の大半が見られたので、一昨年度、昨年度発掘調査資料、赤星直忠氏の著書にある本寺跡の既出資料をも含め、鏡瓦にはY.A、宇瓦にはY.Nを付し、それを瓦当文様により以下の文様系に大別したものである。

鏡 瓦 (Y.A)	宇 瓦 (Y.N)
I 蓮 花 文 系	I 唐 草 文 系
II 巴 文 系	II 剣 頭 文 系
III 寺 銘 系	III 寺 銘 系

さらに各々の文様系の形状差は、その確認された順に01、02、03、……と細分し、同文異範と思われるものにはさらに各々の末尾にa、b、c、……を付して区分したものである。鑑瓦・宇瓦の挿図に記したカッコ内の番号は、この型式分類を意味する（例えばFig. 5-1はYA I 01 bとなる）。

① 鑑（軒丸）瓦

鑑瓦は42点で、型式認定の困難な小破片が2点含まれている。

YA I 01 (Fig. 5-1~4) ; 八葉複弁蓮花文である。内区には1+8の蓮子配列をもつ中房を中心に八弁の複弁を配する。外区内縁には珠文を密にめぐらせ、周縁は幅が広く直立している。蓮弁の形状や珠文等が若干異なった4種が今回検出された。

01b(1)は範の彫りが比較的深く、輪郭線で表現した蓮弁中に小さな子葉を配している。中房の蓮子は珠文より大粒である。01c(2)は珠文が大粒で、蓮弁中に大きな丸味をもった子葉を置いている。01d(3)は蓮弁を輪郭線で表現せず、全体を浮出して平面をなし、その上に子葉を置く。01e(4)は範の彫りが浅く、文様が平面的である。YA I 01は合計18点出土した。

YA II 02 (Fig. 5-5、6) ; 左まわりの三巴文を内区に配し、その外側に大粒の珠文がほぼ均等な間隔でめぐっている。周縁は高く直立し幅が広い。男瓦との接合は高い位置で深くなされ、瓦当裏面は丁寧なナテ調整で平らに仕上げている。6は裏面中央に「□光」の刻印を押している。胎土に砂粒の混入が少なく、YA I 01に近い。比較的硬質で灰色~灰褐色を呈し、10点みられた。

YA II 04 ; (Fig. 5-7) 右まわりの三巴文である。巴の頭部先端はやや丸く、頭部から胴太気味

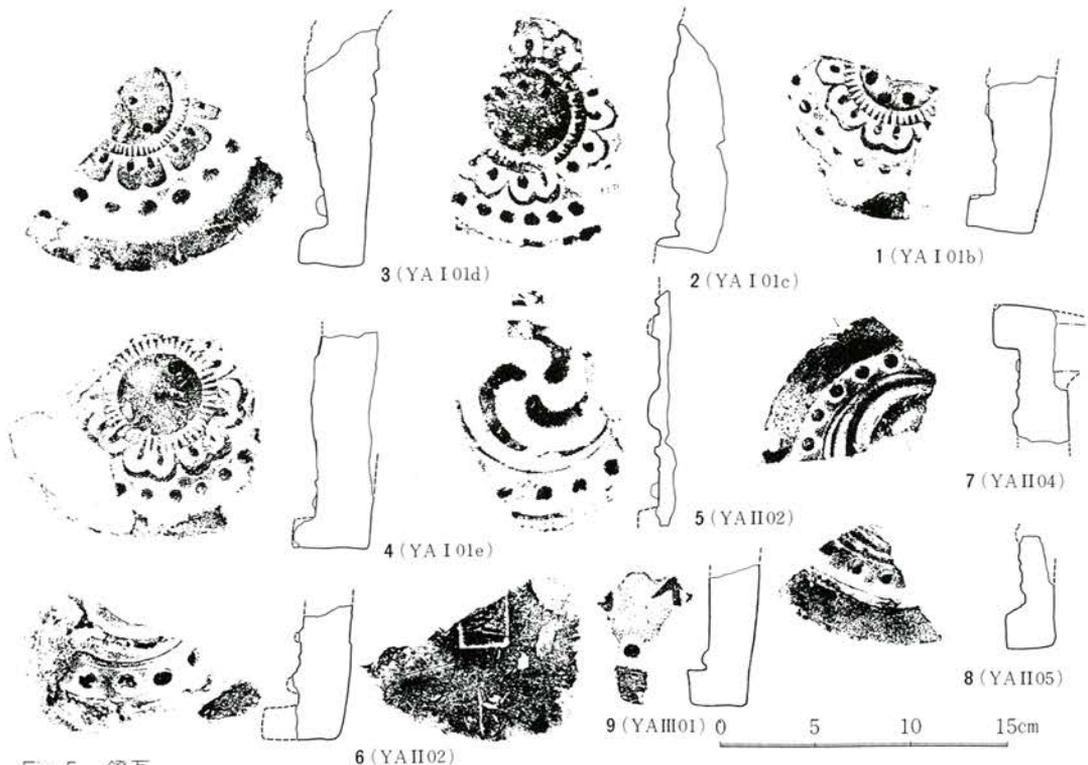


Fig. 5 鑑瓦

に尾部へ続く。その外側は一重の界線に囲まれ、まわりに珠文を密にめぐらす。瓦当面に離れ砂と考えられる黒色砂粒がみられる。男瓦との接合は高い位置で浅くなされ、瓦当裏面はナデ調整を施す。胎土に小石、砂粒を混じえ、焼成はやや軟質で、灰黒色を呈す。4点出土した。

Y A II 05 : (Fig. 5-8) 小破片が6点出土した。左まわりの三巴文を区内に配し、そのまわりを界線が囲み、外区内縁に珠文を置いている。瓦当面に黒色砂粒の離れ砂の痕跡が顕著である。胎土は小石、砂粒を含む粗土、比較的軟質で灰色～灰黒色を呈す。

Y A III 01 : (Fig. 5-9) 小破片が2点出土した。これは、太い文字で右まわりに「永福寺」銘を表現するもので、本例は福と寺の字の一部が見られ、瓦当面にやや粗い離れ砂を使用している。胎土に小石を混じえた砂粒を含み、焼成は硬質である。

## ② 宇(軒平)瓦

今回出土した宇瓦は64点で、このうち型式不明が2点含まれる。

Y N I 01 : (Fig. 6-1~5) 四葉の花弁を十字に配する花文を中心飾とし、その左右に唐草文を反転させる均正唐草文である。中心飾には、各花卉の中央が凹むハート形を呈したものと、花卉が丸味をもったものがあり、さらに唐草文が三反転するものと、二反転と少し伸ばしたものがある。01 b (1.2) は各花卉の中央の凹みが弱く、中心飾から少し離れて唐草を反転させている。01 d (4) は01 b より中心飾が大きく、各花卉もよりハート型に近い。01 f (5) は二反転目の支葉が上向きとなり、范の彫りも浅くなっている。01 g (3) は中心飾の花弁の中央が凹むもので、唐草文が二反転しさらに少し伸びる。

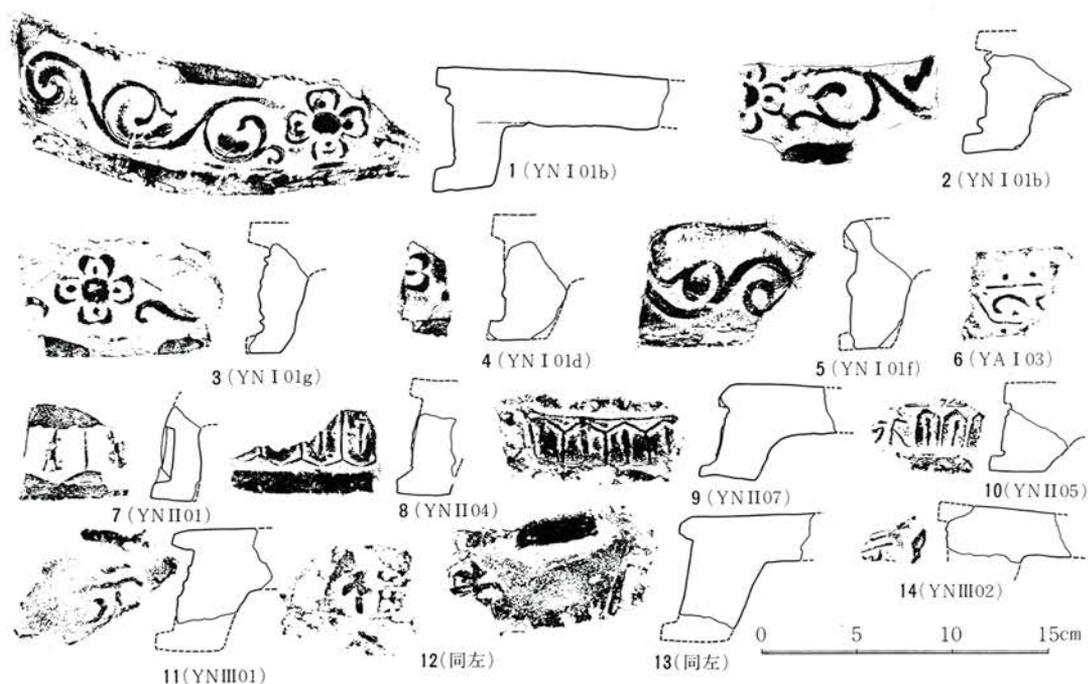


Fig. 6 宇瓦

顎部は女瓦凸面広端縁に沿って粘土を貼付し、段顎を形成する。瓦当上端は横もしくは斜め方向のへら削り調整を施すものがほとんどである。凸面は縦位の比較的細い縄叩き目を施す。本型式は総計51点が出土した。

Y A I 03 : (Fig. 6 - 6) 内区は釣針状の唐草文を上下交互に配し、唐草の巻き込んだ方に石鏃状のものを置く。内外区を界線によって分け、内縁に珠文を配す。焼成は良好だが粗土で、灰褐色を呈す。小破片が1点みられた。

Y N II 01 : (Fig. 6 - 7) 陰刻の下向き剣頭文を連続して配すもので、剣中の鑄は太く先端が尖っている。瓦当上端を斜め方向にへら削り調整を施す。胎土良、焼成はやや甘く、灰褐色を呈す。1点出土。

Y N II 04 : (Fig. 6 - 8) 太い凸線で下向き剣頭文を連続して配している。凹面は細かな布目痕を残す。顎部、頸部は横方向のナデ調整を施す。胎土は砂粒を含むが比較的良土で、焼成はやや硬質、灰褐色を呈す。なお、今回出土した3点は二次焼成を受けて、軟質になったものや、ふくれてコークス状を呈したものがある。

Y N II 05 : (Fig. 6 - 10) 全面を浮き出した上向き剣頭文がそれぞれ独立して配され、又「永」の字が陽刻されている。細い界線が上下に周縁部と接するように置かれている。顎部は横方向のナデ調整を施し、瓦当部と女瓦との剥離面が斜めになる。胎土は小石、砂粒を多く含む粗土で、二次焼成のためか焼けただれて硬質になっている。1点出土。

Y N II 07 : (Fig. 6 - 9) 太い凸線で上向き剣頭文を連続して配し、中央と考えられる位置に三巴文を置く。界線は上下に配されるものの、下方の界線は剣頭文に接している。瓦当部は女瓦凸面広端縁を斜めに切り落とし、別粘土を貼付している。瓦当面に離れ砂の痕跡が顕著で、黒色の細い砂粒が付着し、瓦当上端を斜めにへら削りして調整を施す。胎土に小石、砂粒を多く含む粗土で、焼成の軟質、やや硬質との2点出土した。

Y N III 01 : (Fig. 6 - 11~13) 内区に「永福寺」の文字を左から配した寺銘宇瓦である。瓦当面はやや粗い離れ砂の痕跡が顕著で、上端を横方向のへら削りで調整を施している。顎部と頸部から女瓦にかけて横方向のナデ調整を行なう。胎土は小石、砂粒を含む粗土、焼成は硬質である。4点出土。

Y N III 02 : (Fig. 6 - 13) 「永」の小さい文字を残す寺銘宇瓦である。本遺跡から出土する「永福寺」銘の宇瓦には2タイプが知られているが、本例は右から寺銘を表現したものと考えられる。1点出土した。

### ③ 女(平)瓦

出土した女瓦は量的にも膨大な量にのぼるが、そのほとんどが小片であった。現在水洗いがやっと完了し、分類の作業を始めたところで、全体にわたる観察はなし得ていないが、凸面にみられる叩き目の種類は、縄目、斜格子目(大、小)、特殊文(何種類かの文様を組合せた叩き目)などがある。本稿ではこのうち代表的なものの特徴的なものについての記述にとどめておきたいと思う。

縄叩き目 (Fig. 7 - 1) : 人名押捺の文字瓦を有する一群で、本寺の創建期の主要軒先瓦との対応

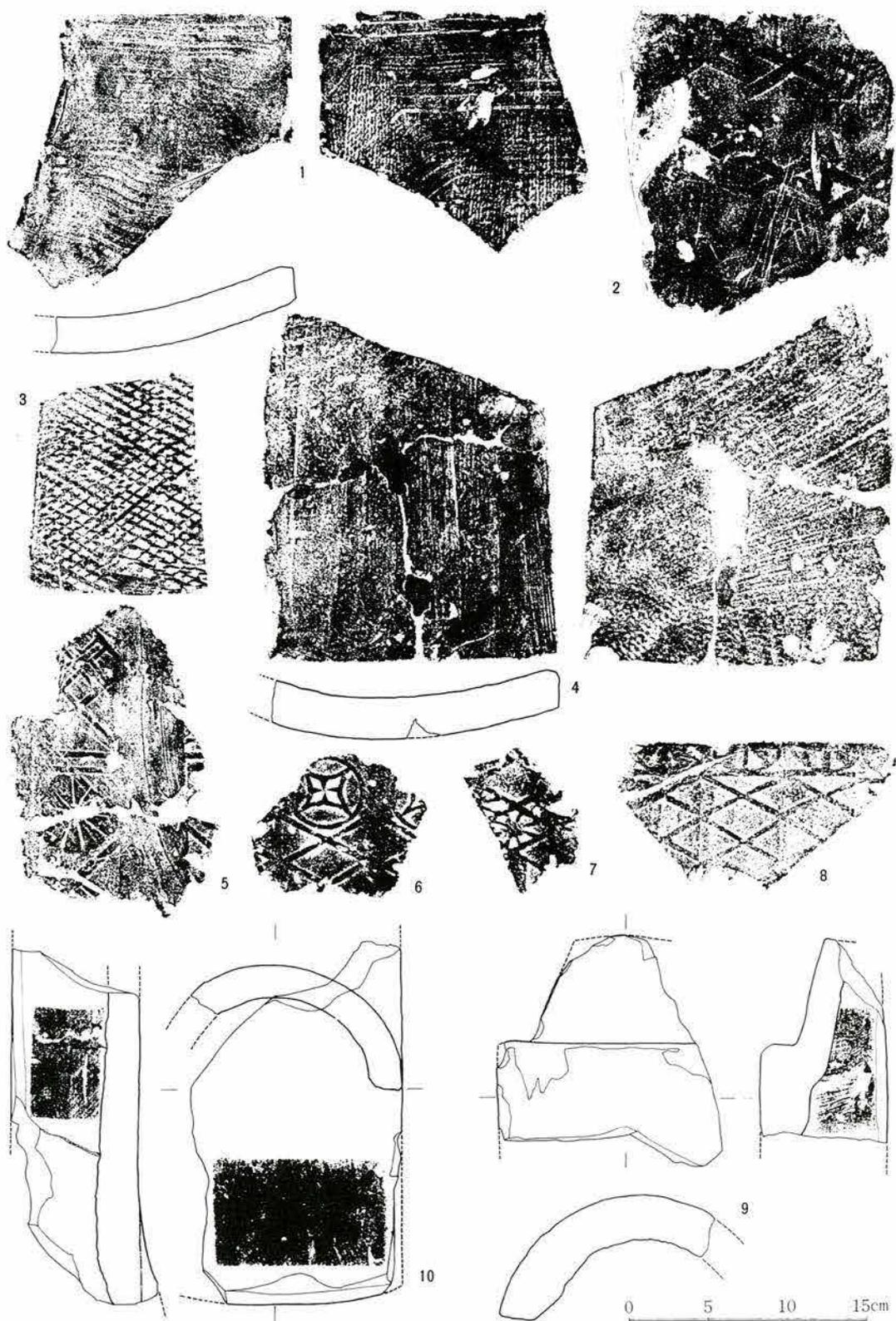


Fig. 7 女瓦·男瓦

が推定される。焼成は軟質硬質の両者があり、灰色～灰褐色を呈する。

凸面は側縁に平行した比較的細い縄目叩きで、縄の条間も密で、叩き目は概して浅い。凹面は布目痕を残すものと、残さないものがある。凹凸面ともに端縁に平行した直線的な糸切痕を明瞭に残し、やや粗い砂粒が多く付着しており、凸面の砂粒は叩き目によって打ち込まれている。

斜格子目 (Fig. 7-2、3)：2は後述の斜格子目叩きの中に文字、記号を組み込んだものを含む一群である。焼成は比較的良好で灰色～灰褐色を呈し、二次焼成を受けて明るい赤褐色を呈する例もみられた。厚手の製品が多い。

凸面は大きな斜格子の叩き目が施されているが、多くはナデ調整によって不明瞭になる。凹面も不規則なナデが施され、ナデの及ばない部分には細かな布目痕を残している。

3は凸面に小さい斜格子文である。焼成は硬質で、須恵質の例もある。灰色を呈す。凹面には布目痕がみられず、砂粒が多く付着している。

特殊文 (Fig. 7-5～8)：「永福寺」銘の文字スタンプを多数含む一群である。これらは、小石を多量にまじえた砂粒を含む粗土、焼成は良好なものが多い。灰白色～灰黒色を呈し、厚手の製品である。火災に会ったためか明るい赤褐色を呈する例もみられた。

凸面にいくつかの文様を縦位に組み合せた叩き目痕を有するもので、5は斜格子文とその一部に花菱を入れさらに菊花文を配した破片で、6は円形中に花菱を入れたものと斜格子文を残した破片である。叩き目から少なくとも2種類以上の叩き板を使用しているものと考えられる。

Fig. 7-4は陶質の特異な女瓦で、各コンテナから抽出した同種の破片がすべて接合できた。凸面は斜め方向の深い糸切痕を残し、不明瞭ながら縄目の叩きが一部に認められた。凹面には縦位の細板圧痕を残すが布目痕はみられない。凹凸面ともにガラス質が湧出している。側面はへら削りの際、はみ出した粘土を凸面方向にナデながら折り曲げている。広端縁をへら削りで調整している。

#### ④ 男(丸)瓦

男瓦は小片ばかりで全体を知り得るものは皆無である。男瓦はすべて有段式(玉縁付)のもので、凸面は縄目叩きを施した後にほとんど削り、ナデで調整を加えられ部分的に縄目痕を残すものが多く認められた。凹面は布目痕、糸切痕を残すが布目痕は有段部分で絞っているために布のシワ、ヨジレがみられた。

本遺跡から出土する男瓦には、胎土、焼成の違いから2種類に大別が可能である。図示したFig. 7-9の一群には焼成が軟質なもの、比較的硬質なもの、胎土は一般的に砂粒を少量含む良土で、焼成の軟質なものには極めて精良な粘土を使用した製品が若干量ではあるが認められた。凸面はナデ調整を施しているがわずかに縄目叩きを残す例が多い。凹面は細かな布目痕、糸切痕を残し、男瓦部側端、端縁を幅広くへら削りし、玉縁部の端縁、側縁にも斜めのへら削りで調整している。また、同図10の一群は小石を多くまじえた砂粒を含む粗土で、焼成は比較的良好だが脆い。凸面は丁寧に調整を施して叩き目を消去した例がほとんどで、稀に男瓦部凸面に縦位の縄叩きの痕跡を認める。

⑤ 文字スタンプ瓦、記号瓦

本遺跡から「永福寺」、「文暦二年、永福寺」の文字を女瓦にスタンプした瓦については、すでに昭和56、57年度の過去2度の調査においてその概要がほぼ報告されている。今年度の調査ではそれ

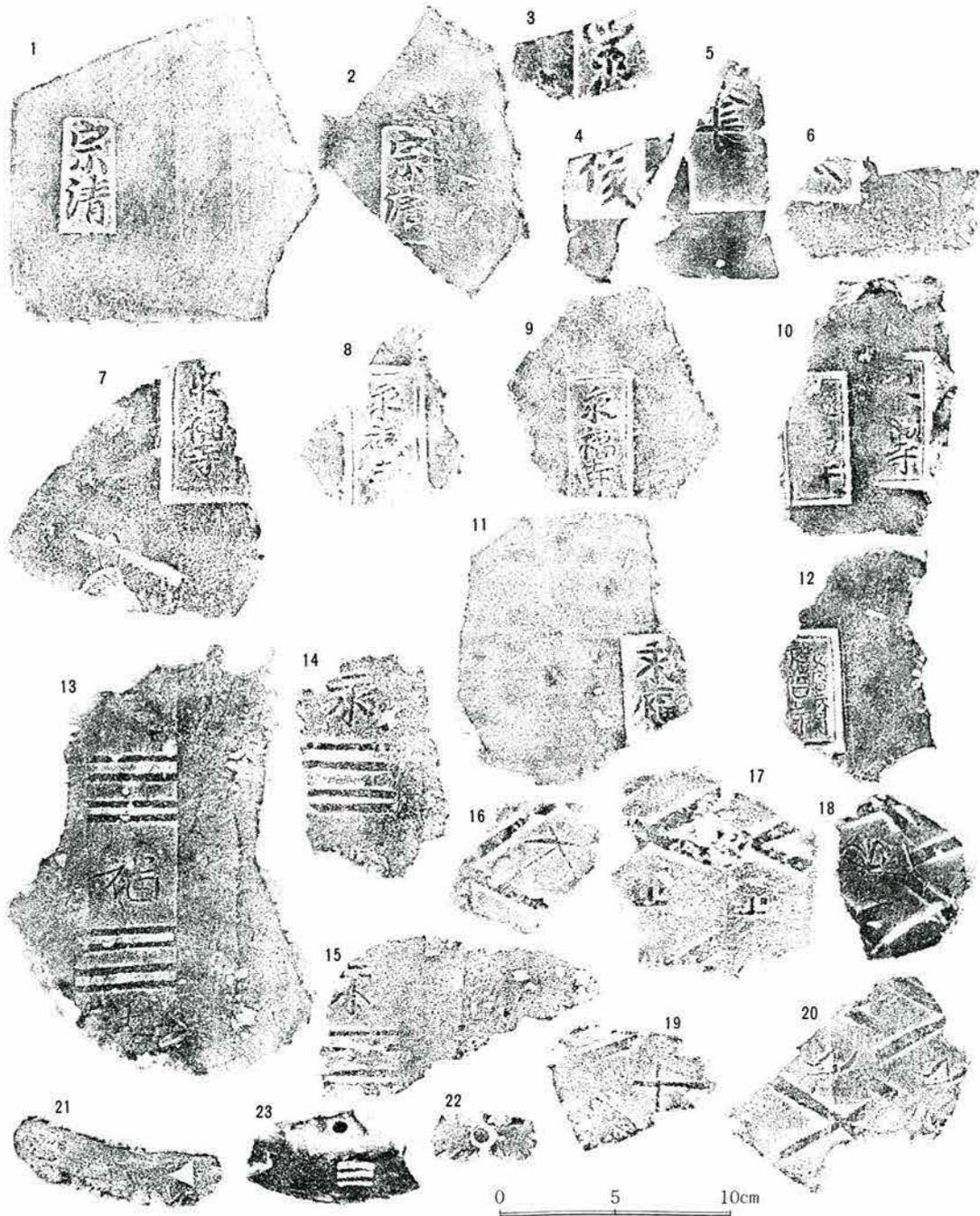


Fig. 8 文字スタンプ瓦、記号瓦

を上まわる量の同種の文字瓦を検出し、また今回新たに発見された人名や叩き目による文字瓦などもあり、その数は女瓦49点、鎧瓦1点の総計50点である。

出土した文字瓦には、女瓦凹面に長方形の陰刻押印を捺されたもの (Fig. 8-1~12) や同種の押印を鎧瓦の瓦当裏面に配したもの (Fig. 5-6) などがあり、また文字・記号を刻み込んだ叩き板で凸面に型押ししたのも認められた (Fig. 8-13~20)。

1~6は人名を刻印した瓦で、1、2は「宗清」、3は「宗□」、4は「□俊」、5は「□長」、6は同種のスタンプ枠を残しているが文字不明である。「宗清」スタンプは計4点見られた。さらに前述の三巴文鎧瓦 (Fig. 5-6) の瓦当裏面中央に「□光」の文字が押捺されていた。

7~11は「永福寺」銘が押捺され、字体や押印の大きさの異なったものが36点出土した。10は同スタンプが2回捺された珍しいものである。

12は「文暦二年、永福寺」の文字を二行に配したスタンプで、この他にもう1点見られた。

13~15は凸面に大きく「永福寺」の文字が押捺され、名字の間に4本の横線が入れている。計4点出土。

16~20は斜格子文の叩き目中に文字、記号が組み込まれたもので、16は裏字で、「大」、17は「上」、18は花押しもしくは花蝶の形を配したもの。19、20にはそれぞれ記号のようなものを表現している。

瓦工場の印と思われるものが3点出土した。21は三角の棒で押捺された三角印、22は竹管で丸印を押捺したもので、女瓦の端面に認められた。23は鎧瓦の周縁に「目」印が押捺されている。

その他、図示しなかったが鬼瓦の小破片が7点出土しているもので、その一部の写真を紹介した。

## (2) 陶磁器類

陶磁器類 (土器も含めて) は、地山上包含層から瓦片と共に出土しているが、種類、量ともにきわめて少なく、特別な出土状態を示すものはない。また時期も様々なものが混在している。

### ① 古代の土器 (PL. 8-2)

弥生式土器と思われる壺の胴部片、土師器(?)片、須恵器が、若干量出土している。当寺域は鎌倉の谷奥としては珍しく幅100mほどの広さをもっていたので、古代から谷戸田を営む集落があったのかもしれない。その痕跡はおそらく永福寺建立時の整地によって破壊され、遺物のみ僅かに中世層に混入したのであろう。

### ② 舶載磁器 (Fig. 9-1~5)

1~3は青磁である。1は折縁の鉢、2は片切彫で蓮弁文を削り出した碗、3は高台内まで釉のかかる碗の破片である。3は旧水田床土中の出土である。いずれも堂址の最終年代より古い。

4、5は青白磁梅瓶の胴部片である。櫛状工具により平行線や渦文を描く、一般的なものである。

### ③ 国産陶器 (Fig. 9-6~11)

6は精胎の山茶碗底部で、付高台の壘付部に僅かに靱痕をとどめる。精胎とはいえ美濃系の白い土ではなく、焼成もやや甘い。瀬戸系ではないかと思われる。

7は瀬戸の碗である。器形は天目茶碗に似る。高台は削り出しで低い。全体に火を受け、釉は溶け固まっているが、緑色を呈する灰釉系のものと思われる。83A区北部の地山上砂層から出土しており、遺物群の中では最も新しい年代を示す。応永12年（1405）の火災で焼けたものであろう。

8は瀬戸のおろし皿である。底部は糸切りで、側壁はかなり開いた形となる。

9は山茶碗窯系の捏鉢の底部片である。高台は貼付けで、内底面は磨滅している。

10、11は常滑の甕の口縁部である。10は縁帯上部が立ち上がり、下に伸びない古い形を示す。11は断面がN字状に近くなってくるが、下部は頸部器壁に接しない。

④ 土器類 (Fig. 9 - 12~22)

12は瓦器質の碗または鉢の底部片で、ロクロ成形、底面へラ切り離しまたは伏せ削りとなっている

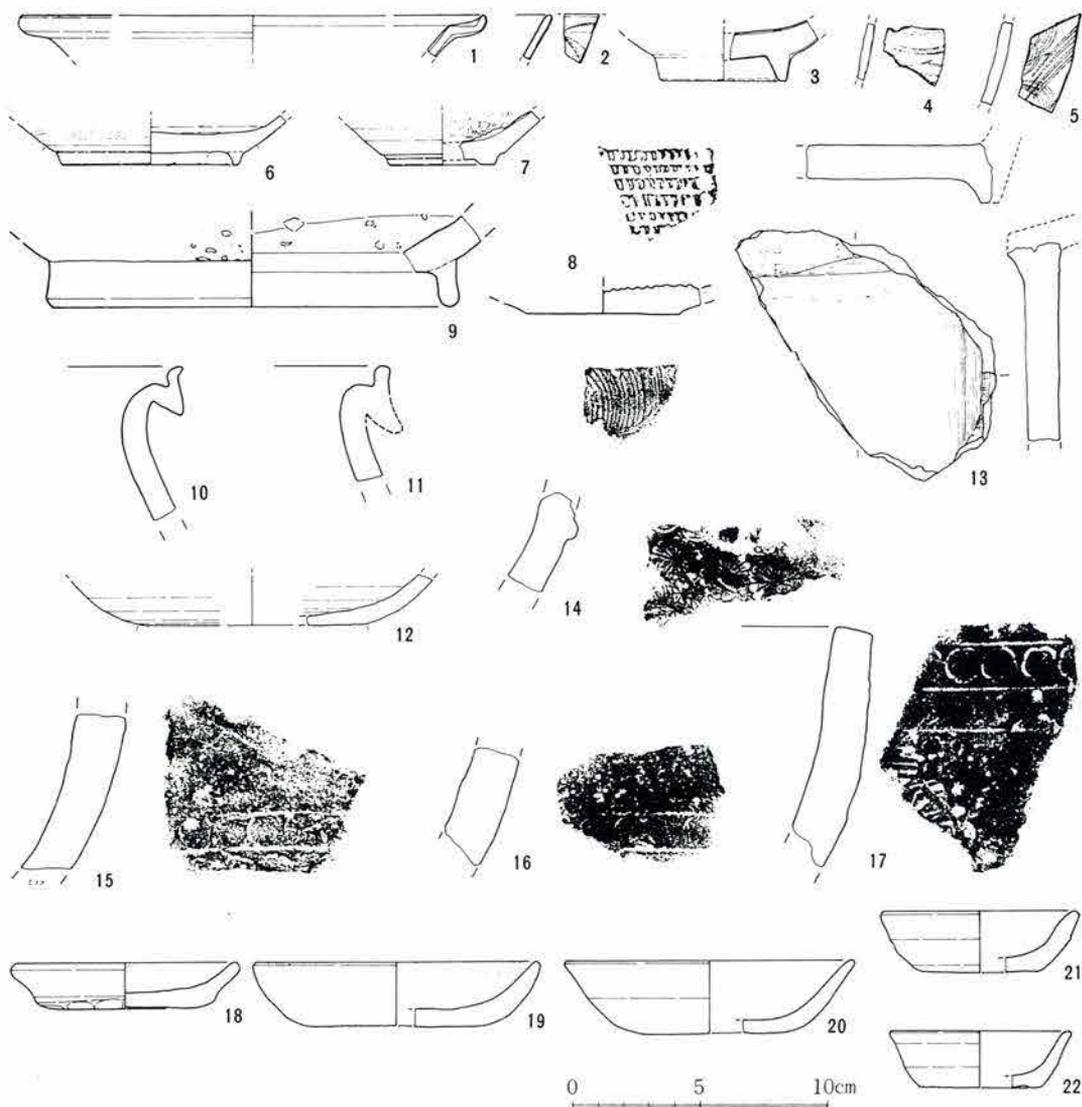


Fig. 9 陶磁器類

る。胎土はやや粉質で混入砂少なく、灰黒色で軽く焼き上がっている。鎌倉では類例をみない品である。鎌倉市街地で出土する瓦器質黒縁皿の、焼造地不明、精胎、ロクロ成形のものに似る。

13は瓦器質の角形火鉢の底部である。四隅に脚が付くものであろう。

14～17は瓦質の手あぶりで、15～17は同一個体と思われる。14では連珠貼付文帯の下に優美な菊花文を連続スタンプ捺しするもので、器表は平滑に磨かれている。15～17は胎土かなり粗雑で、表面のみ磨いて平滑にしており、口縁直下に五葉花文の連続スタンプ捺し、その下に連珠貼付文を配す。また底部に近い胴下端にも連珠貼付文帯がめぐる。このような連珠文帯のある火鉢は、これまでの市内の調査から、14世紀の後半を中心として見られることが知られている。

18～22は素焼きのかわらけである。18は手づくね成形のもので、破片はかなり水磨している。19は糸切り底で側壁が丸味をもって立ちあがる、鎌倉時代後期に一般的なものである。全体にタール状物質の付着があり、灯明皿として使用されている。20～22は糸切り底であるが、口縁が外反する器形で、20は器壁もそう厚くならないのでかろうじて14世紀の末に位置づけられようが、21、22のように分厚くなり器高の高くなるものは15世紀以降に下がるとみなさざるを得ない。

以上のように陶磁器類は新旧のものが混在しており、堂址の年代決定に直接役立つものではない

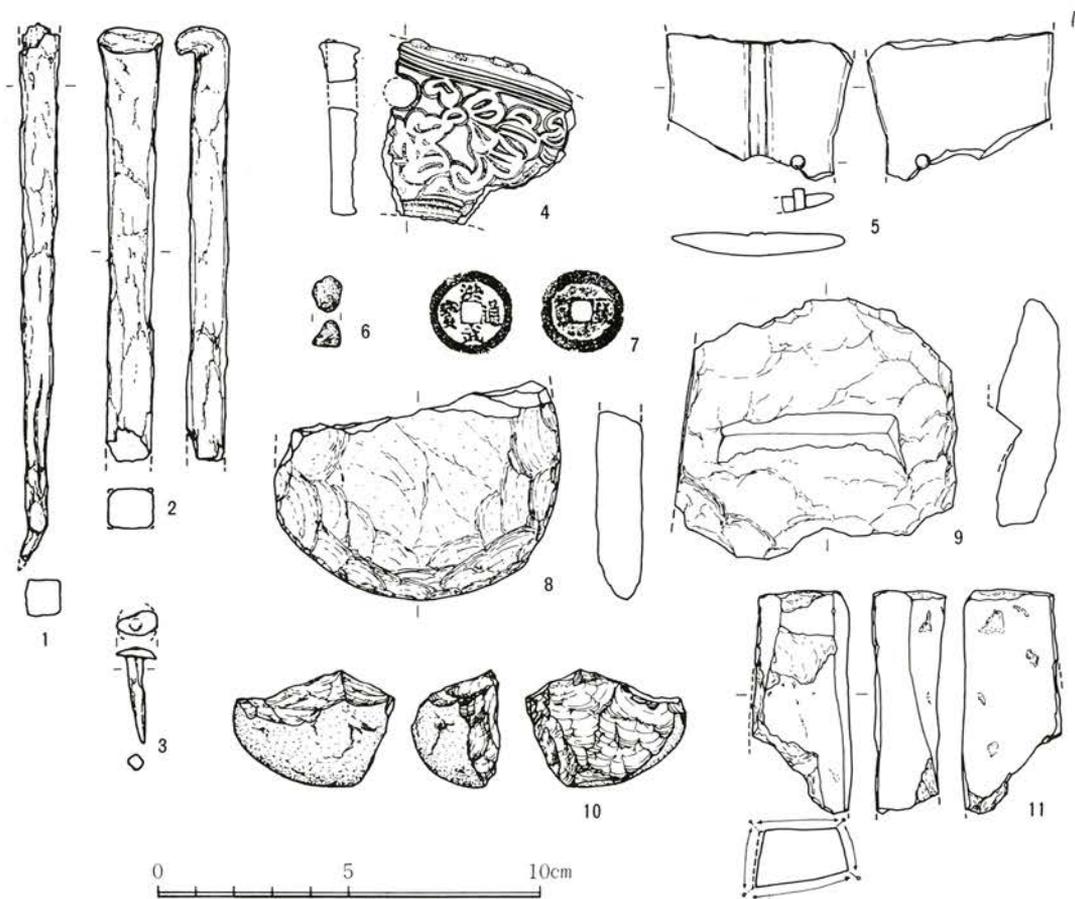


Fig.10 金属製品・石製品

が、10、18のように鎌倉時代前半のものもあるので、この場所が古くから使用されていたことは疑いなかろう。下限としては、7、21、22のように15世紀代と考えると良いものまで含まれているので、応永12年の火災後に寺が再建されなかったという文献史の説が裏付けられるのではなかろうか。

### (3) 金属製品 (Fig.10-1~8)

1、2は大型の釘である。堂址の椽が作り直されていることを考えると、これらの釘も建物の修理に使われたものと考えたい。

3は銅釘であるが、頭部にはおそらく円形をなすであろう笠が付けられている。鉄釘が構造物の補強接合に使用されるのに対し、このようなものは飾り釘であったと思われる。

4は磬の破片であるが、材質は銅のようにみえる。裏面は無文であるが、表面には花文様が巧みに配される。彫り込みは深く、刻線は断面角張るので、象嵌が施されていたのではないかと思われる。全体に火熱を受け、割れ口まで火ぶくれを生じているので、永福寺の火災によって壊れたものと思われる。角柱椽束「ノ」の抜き去り穴覆土より出土した。

5は全形、用途とも不明の銅製品である。断面は翼状で、平坦な面の中央に軸状の凸帯が作られている。その片側には円柱状の銅鋸が貫通しているが、平坦面側に長く折れ残っているので、この面が何かに接して取り付けられていたことがわかる。83A区南部地山面上より出土。

6は火災で焼けて溶け固まった金属粒である。材質は銅のようにも見えるが、一部銀光沢が見え重いので、銀の可能性もある。地山上の瓦片散乱の中から出土した。

7は「洪武通宝」である。背文は右に「一錢」とある。鎌倉の市街地では明銭の出土は皆無に等しく、明銭の出土するのは鎌倉が都市としての機能を失った以降の時代に限られるようである。陶磁器の瀬戸の碗と共に、今回検出の堂址の最終年代を知る手がかりとなろう。

### (4) 石製品 (Fig.10-8~11)

8は縄文時代の打製石斧である。灰色の片麻岩ふうの石を用いている。83A区の南西部の地山上面より出土した。当地の調査ではこれまでに弥生式土器や須恵器・土師器なども出土しており、この谷周辺に先史・古代からの人の居住のあったことがしのばれる。

9は硯の破片で、青黒色の粘板岩を用いている。海と左側辺の一部しか残っていないが、側辺の方向性からすると風字硯か変形硯の可能性はある。

10は火打石である。灰色のチャート円礫を打割し、稜部を打点としている。あまり使いこまれてはいない。

11は砥石である。緑灰色の礫質凝灰岩のような石を用いている。長手方向の四面はすべて砥面として使用されているが、ねじれたようなカーブをもつ。

## 第4章 今年度調査のまとめ

今年度の発掘調査でもっとも大きな問題は、巨大な礎石をもつ五間四方の堂址の検出である。その規模や構造を論ずる前に、まず堂の建てられた土地について考えておかねばなるまい。今回調査の83A区と83B区はともに、一昨年（2019年）の第6トレンチと同じ黒粘土の削平面を地山としており、共通の青味灰色砂層に覆われている。そしてその標高は19m 20～40cm程のところであり、これは一昨年（2019年）の第2トレンチの苑池北岸部とごく近い標高である。さらに、今回の堂址の前面では池汀線に達しえなかったのである。こうしてみると、三堂の前方にあった池は従来考えられていたものよりやや狭いものと考えられ、三堂推定地とすべき谷西半部の山裾の平地はずっと広い面積があったと考えたいところである。

次に上述の平地の中での今回検出の堂址の位置を考えると、西方山裾のラインがB-2杭からI-3杭東方にほぼ直線的に走る中で、ほぼ中間点の前面（東側）に当るのである。堂址の正面の幅は控え目に礎石椽束（裳階？）を含めただけで考えても24mを超える。この堂址の南端から南方Jラインで東に突出する山裾の間には、平地は約50mほどしか残されていない。この中に同規模以上の二つの堂の存在を考えることは難しい。とすれば、今回検出の堂址が二階堂たる永福寺である可能性が強いと云えるのではなかろうか。ただし、今回の堂址を中心として両方脇堂の位置を想定するとすると、83B区に礎石掘り方の一部さえ見出せなかったことが気になる。さらに一昨年（2019年）の第6トレンチで検出されている礎石の性格も未解決のままである。他の堂址の位置や渡り廊下の有無などを知るためには、今回の調査区をさらに南北に広げる形での発掘を着実に進めてゆくほかあるまい。平地南部は山の突出と釣殿の礎石の存在で建築限界は明らかであるが、北部に関してはB・C-3方眼あたりにもう少しトレンチを入れて調べる必要があろう。

さて、今回検出の堂址についてであるが、使用している礎石の大きさの点では鎌倉で最大と云えよう。相当に大きな堂であったと思われるものの柱間の間数では五間四方であるから、手本となった奥州平泉の諸堂には及ばない。この点で永福寺（二階堂）そのものとは断定しきれない。それと角柱椽束から割り出した間尺には不安があり、動かされていない礎石が残っていないだろうかとの想いもある。今後、建築史の諸先生から御教示を受けて検討していきたい。

堂址の変遷についてはいくつかの段階が考えられる。その年代上の鍵となるのは、14世紀終末か15世紀初頭に位置つけてよいと思われる瀬戸碗が、焼けた状態で堂址の面上から出土したことで、この堂の終末年代を応永12年（1405）の火災に求められる点である。それ以前については、堂を建てるために山裾を削り谷を埋めた創建時、礎石椽束（中型の礎石）を使用していた時期、角柱椽束を使用していた時期、角柱椽束も失なわれた時期（確實とはいえないが）の、三ないし四時期を想定しうる。仮にこの堂が二階堂だとしても、創建当初からこの位置にあったとの保証はないが、今回調査範囲では他に掘り方や礎石などは認められないので、この位置で同じ礎石を使用しつつ堂の

変遷があったことは間違いなからう。きわめて残念なことは、鎌倉市街では一般的な地業をくり返して土地をかき上げするということがここでは見られず、むしろ焼け跡などはきれいに片づけられて層位的重なりが見出せない点である。来年度以降の調査で、堂ののる平地が池に落ち込む所でもみつければ、いくらか良好な層序が残っているのではないかと期待している。

遺物の面では、人名とおぼしき文字がスタンプ捺された瓦がかなり出土したことが注目できる。また東海地方（名古屋周辺？）の窯で焼成されたと思われる女瓦（Fig. 7-4）が1枚だが出土したことも特記に値する。鎌倉の寺院址からは瓦の出土こそ多いが、瓦の生産とくにその焼成窯についてはまったく知られていないに等しい。今後とも瓦の資料はさらに良好なものが得られると思うが、人名押印の瓦は問題解決の一つの手がかりとなるであろう。

最後に、今回の調査は史跡の整備を前提としたものなので、遺構は極力そこなわないように注意し、また埋め戻しに際しては遺構面を30cm以上覆うだけの山砂を入れたことを付け加えておく。今回堂址の規模は把握できたとはいえ、北西部は未調査であり、さらに渡り廊下の有無など、今後も

息の長い調査を続けなければならないことは自明である。次年度以降も関係各位の更なる御尽力を期待したい。

末筆ながら、発掘調査から出土品整理までの間、多くの諸先生、諸先輩より貴重なる御教示を受けたこと、また地元住民の方々から御協力を賜ったことを、記して深く感謝する次第である。

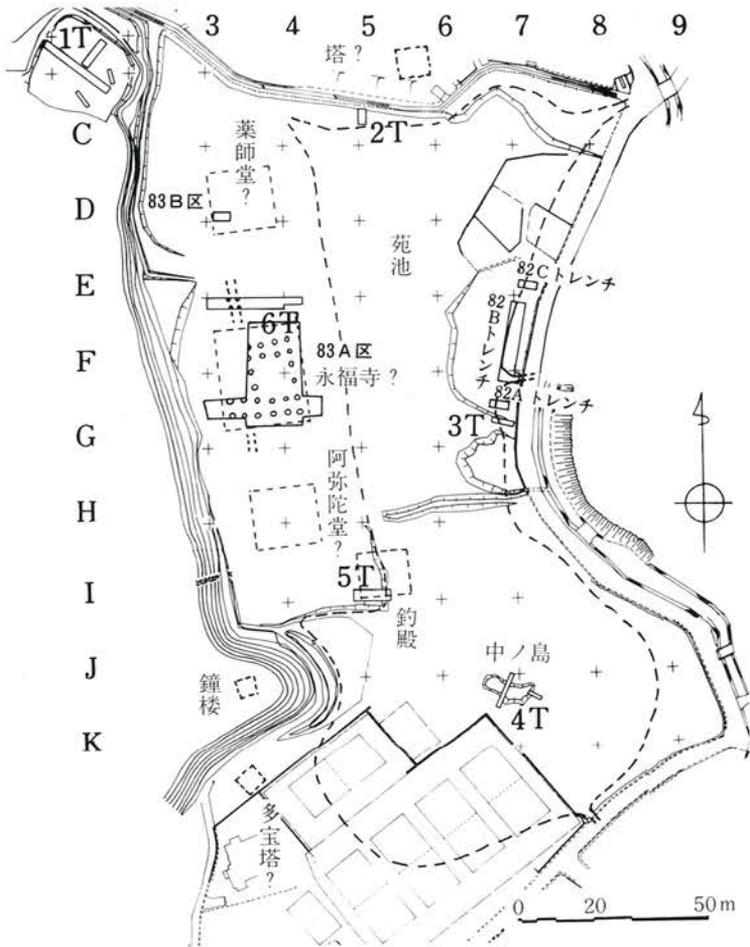


Fig.11 今年度までの調査区と遺構推定地